

平成30年度 学校評価実施報告書

学校名 (洛風中 学校)

教育目標

仲間とともに

納得して学び直す, 心を開いて遊び・語り合う, 自信を取り戻す学習の実践

年度末の最終評価

自己評価	教育目標の達成状況, 次年度に向けた見直し 集団を基本とした学習や体験, 遊びの中で, 生徒の自信を取り戻す教育活動の実践ができている。カリキュラムマネジメントの視点に立って, 教科横断的な取組の工夫を考えていくことが課題である。また, 発達上の特性がある生徒への配慮等合理的配慮やユニバーサルデザイン等の研修を深めることで, より生徒が自信を取り戻す学習の実践になると考える。
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 これまで築いてきた不登校を経験した生徒が通う学校として, 今後も一人一人に対応したきめ細やかな対応の継続は必須である。保護者や生徒一人一人の思い描く学校というものに寄り添いながらも, 集団の力, 仲間を意識した取組は効果があると思う。生徒の「困りごと」として多面的に捉え, SC や総合育成支援員など他職種からの視点を取り入れた教育の実践の継続に加え, 授業者が合理的配慮を意識した授業展開を心がけることが, 生徒全体の学習に対する意欲向上につながると考える。今後も, 授業や取組における一人一人の個性や特技を伸ばし, 自信を取り戻させる取組の継続に期待する。

学校関係者評価の評価日・評価者

	評価日	評価者
中間評価	10 月	学校評議員
最終評価	3 月	学校評議員 学校運営協議会 理事

(1)「確かな学力」の育成に向けて 『学力向上プラン』

重点目標 社会とのつながり・接続を意識できる教科教育 子どもが自己の将来の生き方を見据え, 「みんなと学ぶことが楽しい」「わかる喜びを実感できる」授業を目指す。
具体的な取組 ＊授業での「めあて」を明確に提示する ＊生徒一人一人の実態に応じた教材の工夫だけでなく, 知的好奇心や探究心を引き出す学習内容や集団で学ぶ楽しさを実感できるような学習内容を工夫する。 ＊各教科で対話的な学習の展開を図ることにより主体的に問題解決を図ることのできる学習を進める。 ＊伝統文化や環境に関する学習, 職場体験などの学習等において, 子ども同士が互いに意見を深め合ったり, 学んだことを伝えたりする活動を多く取り入れる。 ＊「学習のしおり」と「指導と評価の一体化」を具体的な資料にまとめ, 生徒や保護者への説明責任を果たす。

<ul style="list-style-type: none"> *子どもの特性を全教職員で理解し、「個に応じた指導計画」等を活用し、よりきめ細やかな支援を行う。 *学習確認プログラム等の取組と検証により、より分かりやすい授業への工夫をする。 *個々の実態に応じた家庭学習の習慣化を図る。 *自己肯定感に基づく学力向上に向けた取組を企画・検討し、ミーティングや学年会・研修等で全体への共通理解を図る。
<div>(取組結果を検証する) 各種指標</div> <ul style="list-style-type: none"> *全国学力・学習状況調査や学習確認プログラムの結果 *生徒アンケート *保護者アンケート

中間評価

	<div>各種指標結果</div> <p>*本校は5月1日付での転入学であるため、全国学力学習状況調査受験者数が9名である。(転入生徒は前籍校での受検の予定ではあるが、全員受けることができていない。) よって、前年度から在籍している生徒に関して言うならば、国語A問題では79%の正答率、国語Bにおいても67%の正答率であることで、比較的国語に関しては力を付けているように感じる。しかし、数学や英語となると、積み重ねた学習の部分が不十分であるため、今後の復習などへの対策が必要と思われる。学習確認プログラムにおいても、数学や理科における補充学習が必要と思われる。</p> <p>生徒アンケートから見ると、教員の授業の工夫に気づきつつも、自らの授業を大切にしたいという意欲につながっていないようである。登校自体が不安定な生徒が多い中で、より学校での生活や学習への意欲を高める工夫の検討が必要であると考えます。また、同じように保護者も、子どもに合った授業の進め方への工夫についての理解は得ているが、実際に基本的な学力が身についているかという点に関しては不安を抱いている方もいるようである。3年生の割合が多いが、今後進路を見据えたうえでの、個々の学力に合った進路選択が重要であると思われる。</p>
自己評価	<div>分析 (成果と課題)</div> <p>本校は特別な教育課程による学習を進めているが、社会と理科に関しては「科学の時間」ということで、一般の学校に比べると授業時数が少ない。そのことが、夜会や理科の正答率が低いことにつながっているように思われる。しかし、数学や英語に関しては、積み上げの部分で、小学校や前籍校での学習ができていない部分の回復から地道に行っているが、特に数学に関しては小学校低学年での部分でつまずきを覚えている。今後、本人の自信回復につなげるためにも、授業での工夫に加え、負担にならないことへの配慮をしつつも、補修や家庭学習が必要と思われる。</p>
	<div>分析を踏まえた取組の改善</div> <p>複数教員や支援員、ボランティアによるサポート体制の充実 補充的な課題の工夫</p>
	<div>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</div> <p>学習確認プログラムの結果 生徒・保護者アンケートによる評価</p>

学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>学校に来るのがまずの第一歩。授業への魅力、取組への魅力、教職員や他の友達との関わりからの自信回復に向けて、さらに教育活動の展開を進める。</p> <p>ＳＣ等や教職員による支援で、精神面でのケアが優先される生徒が多いが、地道に関係性を高めることが、学習への意欲につながり、少しずつ学力の定着へとつながると思われる。</p>
最終評価	
自己評価	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <p>・生徒アンケートにおける「あなたは学校の授業を大切にしていると思うか」という質問に対する肯定的な回答が約 10%下がっている。「先生たちは授業を分かりやすく工夫してくれていると思うか」に関する積極的肯定の評価が前期よりも 10%以上増えている。保護者アンケートにおいては、「子どもに合った授業の進め方が工夫されていると思う」における肯定的評価が 88%と前期より 8 パーセント増えているが、「子どもは授業を理解し、基本的な学力が身についてきていると思う」における肯定の評価は 86%と前期と大きくは変わらないが、積極的肯定が 24%と前期より 8%減少している。ただ、否定的評価も前期よりも 10%近く減少している。</p> <p>・学習確認プログラムにおいて、個々の生徒の学力の向上を図ることはできるが、学校としての変化の判断に関しては、受検生徒数が少ないため、指標にはなりきらないようである。国語では、他の 4 教科と比較すると、回を重ねるにつれて少しずつ正答率が上がっているように思われる。学年によっては特に数学の正答率に伸び悩みを感じる。</p>
	<p>分析（成果と課題）</p> <p>・生徒アンケートや保護者アンケートの変化に関しては、特に受験を控えた 3 年生たちが学習に対しより高い結果を求めるようになったことも影響していると思われる。転入学当初は学校になれる、集団になれるであった生徒も、授業の中でより知識欲が高まり、積極的に授業に参加しているように見受けられる。ただ、なかなか点数などの結果が伸び悩む中で、自信をなくさないように、より個に応じた指導の在り方が大切になると考える。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>・特に、三年生に関しては、「未来スタディ」による自習を中心とした学習に向かう時間や朝学習の時間を活用して、個々のつまずきや困りに対応するようにした。また、1・2 年に関しては、家庭学習の習慣づけを図るべく、宿題などの課題の提示方法を工夫した。</p>
学校関係者評価	<p>重点目標の達成状況、次年度の課題</p> <p>・授業においては、すべての教科において、ペアワークやグループでの活動を取り入れ、小集団での意見の交流や発表を繰り返し取り入れてきた。コミュニケーションやこれまでの学習経験の違いなどから、参加に抵抗を感じていた生徒も、教職員の支援の工夫や経験を重ねる中で慣れることができたようである。人前で話すことや文章を書くことへの抵抗感が薄れた生徒も増えたことから、次年度も「自己表現」の機会を増やし、他の意見や考えを知ることによって自らの考えや力を深めることに役立てていきたいと考える。</p>
	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>「みんなと学ぶことが楽しい」「わかる喜びを実感できる」は一人一人の生徒の力を伸ばすことだけでなく、集団としての力をつけることにもつながる。不登校の原因の一つに発達上の特性もあり、その特性は一人一人異なる。そのためにも、合理的配慮も含めユニバーサルデザインを意識した授業展開が必要である。より効果的な授業展開を進めていくためにも効果的な研修を進めていくことが必要である。教育相談・特別支援の視点等いろんな視点から個々の生徒へのアプローチがしやす</p>

いように助言をしていく。

（２）「豊かな心」の育成に向けて

重点目標 自己肯定感を取り戻し、主体的に学校生活を送ることのできるよりよい学習環境づくり
互いに認め、認められる集団（仲間）づくりを展開できる取組の充実

具体的な取組

- ＊生徒一人一人の実態や課題の把握に努め、学校という場における生徒の心の安定を図る。
- ＊すべての教職員が生徒の人間関係作りに携わり、適度な距離感で接することで生徒自らが「心の落ち着き」を感じることでできる空間を作り出す。
- ＊「ヒューマンタイム」や「風夢風夢」等での主体的な取組の工夫を図ることで、生徒の「心にしみる体験」をさせ、一人一人の自信に結び付くようにする。
- ＊縦割りの関係を生かし、仲間を意識した活動を意図的に取り入れることで、お互いをモデルにして成長できる場として、一人一人が自己有用感を高めることができるようにする。
- ＊様々な伝統文化体験や地域等の人たちとの出会いの場を通して、「身にしみる体験」をする中で、豊かな感性や情操を育む。
- ＊毎日のショートヒューマンタイムの中で、「食教育」「健康教育」「係活動」を定例で行う時間を確保する。また、生命の誕生についての学習を深め、命の大切さを考えたり、豊かな人間関係を築いたりする力を養い学習をする。

（取組結果を検証する）各種指標

- ＊各取組ごとの振り返りシート
- ＊生徒アンケートや保護者アンケート

中間評価

各種指標結果

登校が安定していない生徒の中には、取組などの行事ならばという生徒もいる。学校の行事や取組が充実していると感じている生徒が大半である。その取り組みの中で、少しでも人とのつながりをはじめ豊かな心の育成につながればと考える。

自己評価

分析（成果と課題）

楽しく学校に通うことができていると感じることができていない生徒がいるのが現状である。大半の生徒は楽しいと考えているようではあるが、実際には遅刻せずに登校できていない生徒も多くいる。一人一人の課題はあるが、取組を経験することで、少しずつ自信に繋がればと考える。学校の仲間を大切にできているかという問いに対しては、回答者のほぼ全員がそうであると答えている。教職員が自分の話をよく聞いて、理解しようとしてくれているかという問いには、全員が肯定的な評価をしている。教職員との良好な関係から同年齢、異年齢の仲間との関係作りへと繋がっていていると考える。

分析を踏まえた取組の改善

より子どもたちが興味や関心をもてるような、また自分自身の内面との向き合いにつながるような取組の内容を感ることが必要である。取組などへの教職員が掛ける時間や労力は大きなものがある。しかし、それを子どもたちがどう受け止めているか、どんな成果が上がってかなど、教職員間での共通理解へとつなげていくことが必要と考える。

	<p>(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標</p> <p>取組や行事への参加の様子。</p> <p>生徒アンケート，保護者アンケート</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>ヒューマンタイム（特別活動や道徳的な内容）や風夢風夢（総合的な学習の内容）の工夫を子どもの実態に応じて工夫を続けている。広く社会に目を向けて取組を増やすことで、今後社会へ繋がる視野や視点を広げることにつなげていってほしい。</p>

最終評価

	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <p>・取組ごとの振り返りアンケートによると、どの取組においても素直に学んだことや感じたことを表現している。「学校の行事や取組は充実していると思いますか」とい質問に対する生徒アンケートでは、56%と前期よりも 10%近く積極的肯定な回答になっている。保護者アンケートによる「学校行事は子どもの力を伸ばすために役に立っていると思う」という質問に対しては大半が肯定的な評価である。また、生徒への「先生たちはあなたの話をよく聞いて、理解しようとしてくれていると思いますか」という質問に対し、70%近い生徒が積極的肯定の回答をしている。</p>
自己評価	<p>分析（成果と課題）</p> <p>ヒューマンタイムや学校行事等の取り組みは、より生徒が主体的に取り組むことができるようにと工夫をしてきた。また、講演などにおいても、より生徒の心にしみるようにと講演者の選定などを心がけた。特に、「秋パーティ」や「三年生を送る会」の企画・運営に関しては、対象がはっきりしているため、相手に喜んでもらうには、楽しんでもらうためにはと生徒と教職員が共に考えを出し合い、取り組んでいくことがより生徒の充実感に繋がっているように思われる。年々、取組内容がエスカレートしないためにも、生徒の実態をしっかりと共通理解し、内容の精選が必要と思われる。</p> <p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>毎年、転入学してくる生徒の背景や特性が異なるため、取組は継承しつつも、それぞれの生徒の十対に合ったものを企画・運営していくことが必要である。カリキュラムマネジメントの視点からの、教科との連携を図りつつ、内容を再構築していくことが必要と思われる。</p> <p>重点目標の達成状況，次年度の課題</p> <p>自己肯定感を取り戻すためにも、成功体験は効果的である。また主体的に学校生活を送るためにも、生徒の自己有用感を持たせるための配慮・工夫が必要である。不登校を経験する中で、それら生徒一人一人の内面における困りに対し、より生徒が心を開きやすい環境や雰囲気作りが求められる。生徒の心に響くような教職員一人一人の生徒との関わり方が求められがちであるが、組織として生徒一人一人を大切にできるように、情報交換や共通理解を大切にしていきたいと考える。「心を開き遊び語り合う」関係づくりを大切にしていきたい。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>本校の根幹に関わる取り組みである。不登校を経験した生徒がしっかりと自分自身と向きあうためにも、集団での活動、仲間を意識した取り組みは不可欠である。</p> <p>昨今はSNSにおけるトラブルが気になるころではあるが、根底にある人を思いやる心を育てることが、トラブルを回避したり、未然防止したりすることにつながる。トラブルもチャンスととらえ、丁寧な関わりを根気強く進めることで、生徒の心の成長につながると考える。</p>

(3)「健やかな体」の育成に向けて

重点目標

- ・基本的な生活習慣を身につける。
- ・自らの体の状態を知り、より健康な体と心を保てるように調整する方法を知る。
- ・心と体を一体としてとらえた指導を行うことで、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

具体的な取組

- ・毎日の健康観察を通して、心と体の状態を生徒自身がコントロールできる力を養うとともに、よりよい自らの生活が社会貢献につながる心身の形成につながることを意識させる。
- ・昼休みや放課後の時間を体を動かす機会とし、多くの生徒が遊びに参加する中で体力の増進を図るよう働きかける。
- ・「保健だより」や「安全教室」等の取組を活用し、健康に関する知識を深めたり、健康や安全に留意したりして、食事・運動・休養・睡眠の調和のとれた生活習慣を身につけさせる。
- ・健康月間の取組の工夫により、自然な働きが心身と脳のつながりを活発にさせることに気付かせる。
- ・「食教育」等でよりよい食習慣の形成ができるように、家庭との連携を図りながら、心身の健康の保持増進を目指す。
- ・性に関する学習において、SNS を通しての性的被害や、性同一性障害・性的指向等に係る理解を深める。

(取組結果を検証する) 各種指標

- ・健康観察シート
- ・生徒アンケート、保護者アンケート

中間評価

各種指標結果

睡眠不足を訴える生徒が多い。昼夜逆転傾向の生徒も多くいる。規則正しい生活に向けた地道な指導や関わりが必要と思われる。また、腹痛や頭痛を訴える生徒も多く、大半が精神的な不安定さからくるものがある。今年度の生徒は、昼休みに屋外などで運動をすることを避ける傾向があるようである。まだまだ仲間との関係性に不安を抱えている生徒が多いことに起因するのかもしれない。

自己評価

分析（成果と課題）

健康観察シートから見ると、就寝時間が遅い生徒が多い。遅い原因などを尋ねると、精神的な面もあるが、SNSなどに起因している生徒も多い。毎月の保健便りを使った全校での保健指導などをより丁寧に進めていくことが大切である。

分析を踏まえた取組の改善

健康診断などの結果を踏まえ、保護者も含めた保健指導が必要と考える。生徒によっては学校医による保健指導なども進めていくことが必要である。

(最終評価に向けた) 取組の改善を検証する各種指標

保健室や保健体育の教員などを中心に、生徒の生活面での実態把握に努めるとともに、生徒への働きかけを進めていく。

毎日の健康観察での個々への細やかな指導を継続する。

学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>基本的な生活習慣の安定が望ましい。生徒だけでなく保護者も含めた保健指導や健康指導を進めていくことが大切である。</p> <p>転入学生徒を中心に、精神的に不安定な生徒が多いため、細やかかつ粘り強い指導の継続が望まれる。</p>
---------	---

最終評価

自己評価	<p>中間評価時に設定した各種指標結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・登校状態が不安定な生徒が少なくない。 ・睡眠が不十分と思われる生徒が少なくない。 ・毎日の生活習慣が安定していない生徒が少なくない。
	<p>分析（成果と課題）</p> <p>個々の生徒がの困りに寄り添うべく関わりを大切にしているが、生活習慣等の改善には家庭との連携・協力が必要となる。懇談会などにおいて、担任からだけでなく養護教諭からより専門的なアドバイスを親子にすることで、改善につながるようにした。しかし、昼夜逆転傾向の生徒生活改善にはなかなか至らなかった。</p>
	<p>分析を踏まえた取組の改善</p> <p>ショートヒューマンタイムでの毎月の保健指導や、係活動を生かした健康な生活への呼びかけをすることで、生徒の関心の高まりはあったと考える。</p>
	<p>重点目標の達成状況，次年度の課題</p> <p>基本的な生活習慣の意義・意味を理解できるように、保健だよりの活用だけでなく、日常的に担当から声掛けやアドバイスをしたり、家庭への協力を求めるなどを根気強く進めていく。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>体調改善に向けて、専門的な知識による治療も時には必要となる。丁寧に生徒の実態に寄り添うことをするだけでなく、専門機関との連携を進めていくことも視野に入れることが大切である。また、体育の授業や休み時間、放課後において、体を動かすことで内面のエネルギーの発散に繋がることに気づかせるとよい。</p>

（４）学校独自の取組

<p>重点目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒューマンタイムや風夢風夢の方向性・内容の確認 ・不登校支援センターとの連携の充実 ・教育相談体制の充実
<p>具体的な取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「創夢委員会」における「ヒューマンタイム」や「風夢風夢」、学校行事の内容の確認と調整をする。 ・転入学生徒受け入れに係る情報交換や連携の充実を図る。 ・「なぎの時間」や保護者のスクールカウンセラーとの面談や教育相談体制の充実を図る。
<p>（取組結果を検証する）各種指標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒アンケート ・保護者アンケート

中間評価

自己評価	各種指標結果 スクールカウンセラーを中心に面談（カウンセリング）を進めている。子どもだけでなく保護者へのアプローチによる子どもへの支援方法も少しずつではあるが効果を出しているように思う。 ヒューマンタイムや風夢風夢の内容などは学年を中心に、生徒の実態に応じた形での検討を進めている。やはり、毎年転入学してくる生徒に応じて学校の様子も変わる。まずは安定した登校に繋げるためにも、生徒の興味関心に敏感であるとともに、教職員の連携による取組の充実が必要と考える。
	分析（成果と課題） 今年度は特に登校が不安定な生徒が多い。それぞれの課題もあるが、その課題を共通理解し、より専門的な支援方法を考えていくことも必要である。個に応じた指導計画の活用から、生徒一人一人の実態に応じた支援方法、集団としての活動の魅力等を教職員が一体となって模索していくことが大切である。学校は過ごしやすい場所になっているかという問いに対し、2割の生徒がそうでないと感じている。より一人一人との関わりを大切にしながら、生徒に寄り添う関係作りを進めていく。
	分析を踏まえた取組の改善 全員への「なぎの時間」（カウンセリング）から個々へのカウンセリングへと広げていく。
	（最終評価に向けた）取組の改善を検証する各種指標 生徒アンケート、保護者アンケート
学校関係者評価	学校関係者による意見・支援策 一人一人の背景は様々で、また一人一人の課題もさまざまである。より教育相談の取組を進めていくことが大切である。

最終評価

自己評価	中間評価時に設定した各種指標結果 生徒アンケートの「学校はあなたの過ごしやすい場所になっていますか」という質問に対し、積極的肯定意見が8%増えた。しかし、同じ質問に否定的な回答をしている生徒が0ではない。同じく、「あなたは楽しく学校に通うことができますか」とい質問に対しては、80%を超える生徒が肯定的な意見ではあるが、やはり否定的な意見を述べている生徒がいる。これは保護者もほぼ同ような評価をしている。
	分析（成果と課題） おおむね生徒は「学校」という場に改めて適応を示しているようではあるが、まだまだ本人の特性や心の状態もあり、まだまだ登校が安定していない生徒が少なくない。一人一人の実態に応じた登校の形をとってはいるが、集団や他とのコミュニケーションを苦手とする生徒にとっては、なかなか越えにくい壁があると考え。
	分析を踏まえた取組の改善 より一人一人の生徒の内面を理解し、困りなどに手立てや寄り添うことが求められる。SCや総合育成支援員のアドバイスを得たり、「洛風パル」によるボランティアによる支援を得たりすることで少しずつ生徒の困りに近づくことができているように考える。それでも十分に心を開けなかったり、自己の内面を言葉で表現することが苦手な生徒の思いに近づくことは難しい。より、教職員が情報共有し生徒の信号を見逃さないようにしなくてはならない。また、生徒の実態の分析においては保護者との連携や保護者の困りに寄り添うことは不可欠である。

	<p>重点目標の達成状況，次年度の課題</p> <p>生徒の困りや悩みに対し，日常的に話しやすい状況を心がけているが，教員だけでなく専門的な関わりが必要な場合は，スクールカウンセラーによるカウンセリングを進めている。また，生徒だけでなく，保護者もカウンセリングを受けることで，家庭での生徒との関わり方へのアドバイスを受けている。「カウンセラーを囲む会」を実施することで，保護者自身の悩みを外に開放できる場を設けているが，実際参加できる保護者が固定化している。今後，保護者自身の悩みや困りへの対応方法も検討していきたい。</p>
学校関係者評価	<p>学校関係者による意見・支援策</p> <p>転入学時における生徒・保護者の納得の度合いにもよるが，体験的な活動をする中で少しずつ自己肯定につながると考える。</p> <p>ゆっくり時間をかけて生徒や保護者と向き合う姿勢を大切に，よりヒューマンタイムや風夢風夢（総合的な学習）の効果的な活用を工夫することが大切である。</p>